

大会趣旨：

日本は 20 世紀末から 21 世紀にかけて世界トップクラスの長寿国となり、現在、人生 100 年時代といわれるようになりました。平均寿命は今後も延伸するものと予測されています。人口構成は 2010 年には 65 歳以上の高齢者の割合が 21%を超え超高齢社会に突入、同時に少子化が進み社会構造が大きく変化しました。

加えて医療機器や技術が進化することで、複数の病気を有しながら生きられる世の中となりました。平均寿命と健康寿命との差は「健康ではない期間」を意味します。厚労省の 2022 年の調査では、健康でない期間は男性が 8.49 年、女性が 11.63 年となっています。つまり病気を有したまま何年も余生を過ごすようになったのです。

かつて言語聴覚士の教育・臨床は、機能訓練や治療といった「cure」が中心だったように思います。しかし言語聴覚士も他の職種と同様、従来の cure に加え、重度化した超高齢者を人生最期まで対象とし、その病気等に寄り添う「care」が強く求められるようになりました。

このような時代の移り変わりのなか、厚労省は言語聴覚士法成立後初めての「言語聴覚士養成カリキュラム改善検討会」を主宰し、2025 年度以降の入学生を対象に最新の医療へのアップデートと、福祉や特別支援学校教育を含めた新時代に対応できる言語聴覚士の養成へと舵を切りました。

今回の学会ではこうした背景を鑑み、テーマを「人生最期まで支え切るために」とし、最新の根拠を基本とする「evidence」と、対象者や家族の人生の物語に寄り添う「narrative」の双方に焦点を当て、教育講演、会長講演などは「明日からの臨床を変える」ことにこだわった内容としました。

今回 20 回記念大会ということで実行委員一同も気合いを入れ、現任の言語聴覚士と養成施設の学生のみなさん、他職種のみなさん、さらに一般市民のみなさん全員に満足していただけるプログラムを用意したものと自負しております。2026 年 6 月 14 日（日曜日）、ぜひ吹上ホールにお越しください。

第 20 回一般社団法人愛知県言語聴覚士会学術集会 大会長 牧野 日和